

雁の声

松岡隆子

降り立ちて金町駅の秋時雨
家々の灯りの零れ夕化粧
鳴くものの声透きとほる水の秋
川幅を波の急げる雁のころ
碑へ飛石の雨踏んで秋
みづうみへ降る雨白き秋彼岸
秋の蟻踏まないやうに来たつもり

どの路を行きても秋の深きかな
日の暮の対岸とほき葛の花
結局は来た道もどる秋の暮
一つ忘れ二つ忘れて雁の声
頬杖の目つむり癖も虫の秋

先日五月会の吟行で水元公園を訪ねた。折からの冷たい雨に辺りは俄に冬めいた景観を呈していた。ふとコートのポケットに両手を入れて水辺に佇んでおられる先生のお姿が思われた。

目下念願の『岡本陣全句集』刊行の準備中である。全句集刊行のことはご生前に先生がふらんす堂に依頼されており、野路斉子さんに何かと託されていた。野路さんのご意向を受け刊行委員の皆さんと良いものを作るべく励んでいるところである。